

# メールマガジン

Vol.2 2025.7.31

平素は東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター事業へのご支援を賜り厚く御礼申し上げます。さて、Vol.2のメールマガジンは、下記内容のご紹介です。

- 【1】 インタビュー “屋根のある公園”のような居場所を目指して。多様な団体が共同で運営する地域福祉拠点「笹塚十号のいえ」 TENS-SHIP アソシエーション 代表理事 戸所信貴さん
- 【2】 コラム「通いの場の担い手をみつげるために」  
東京都健康長寿医療センター研究所 東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター 中本 五鈴

京王線笹塚駅北口から徒歩約5分。東京都渋谷区の笹塚十号通り商店街の真ん中にある、「笹塚十号のいえ」は、複数の民間団体による共同運営で実現してから一年。誰もが、ありのままにいられる安心の基地、安全な避難場所として、このまちに暮らす人々を、大きな家族のように緩やかにつなぎ、助け合い、育み合う機能を果たしています。笹塚十号のいえは、複数の団体が共同で拠点運営していくことで複合的な課題の解決に挑む、新たなモデルです。他地域での展開が期待されるものとして、ご紹介します。

## 【1】

“屋根のある公園”のような居場所を目指して。

多様な団体が共同で運営する地域福祉拠点

「笹塚十号のいえ」

TENS-SHIP アソシエーション

代表理事 戸所信貴さん

笹塚十号のいえは、週3日の営業日には1日あたり40人から50人が訪れ、いつも賑わいを見せています。利用者は高齢者が約8割、男女の割合はほぼ同等です。地域のさまざまな人が気軽に立ち寄る場となっています。営業日以外に、月に2回「十号のいえマルシェ」を開催し、1日は運営団体の福祉事業所が、それぞれ商品や作品を販売しています。もう1日は、外部からの出店も受け付けて、まちの人が「得意」を披露する場になっています。取材に伺った日は、木曜日の午後三時頃で、大学生がネイルを塗るボランティアが入っていました。その他、お茶を飲みながら談笑する人、待ち合わせをする人、

学校帰りに立ち寄る小学生、取材陣に「なぜわざわざ出して和ませる常連客から、何をしてもなくたってきたので、お茶やアイスの注文をする人も多く、その場を見守る店番のスタッフは、話し相手になったりお茶を運んだりと何役もこなしながら、笑顔が絶えない様子でした。



京王線笹塚駅から徒歩 5 分ほどのところにある十号商店街。角地にある「笹塚十号のいえ」

営業日に合わせて、みんなでご飯を持ち寄って一緒に食べる「十号の食卓」、営業終了後のケアする人の飲み会「スナックまいまい」など飲食を伴うイベントや、アーティストの作品展、利用者による楽器の演奏会が開催されることもあるそうです。また、小学生への学習支援に大学生が関わって行う取り組みも始まっています。

## 小さな団体が集まって 「スイミーモデル」で運営をスタート

笹塚十号のいえプロジェクトの代表を務めるのは、一般社団法人TENISHIPアソシエーション代表理事の戸所信貴（とどころ のぶたか）さんです。戸所さんは、2007〜2019年の12年間、渋谷区内の地域包括支援センターに勤務し、最後はセンター長を務められました。しかし、複雑かつ複合的な課題を抱えていて行政の公的なサービスのほかに置かれ、支援につながりにくい人の多さと、都心の住宅街における地域のつながりの希薄さに気づきました。そこで、2019年に退職し、「ささはまちのお手伝いマネージャー」（アウトリーチ事業）の仕事を中心に法人を立ち上げ、地域づくりの活動に取り組んでいます。

笹塚十号のいえは、元は98年間続いた八百屋でした。お店の並びに事務所を構えて、地域の高齢者への配達のお手伝いなどを請け負っていた戸所さんに、持ち主から「八百屋を閉店するから、地域のために使ってくれないか」と相談がありました。

お金でサービスを買うお店ではなく、公的な施設に行くでもない、誰もが気軽に無料で立ち寄れる民間の「屋根のある公園」のような場所の必要性を感じていた戸所さんは、配達を通じて直にその人の暮らしに関わる八百屋は新たな福祉のあり方だと感じて、一度は八百屋を継ごうかと思ったこともあるそうです。

しかし、ここは都心の一等地であり、家賃だけでも大きな負担です。そんな時、以前から仲間として協力しあってきた団体の一人が「家賃の10分の1なら負担できるかもしれない。法人で無理なら個人

で出してもいい。」と声をかけてくれたことから状況が一転しました。同じく場所や拠点を必要と感じていた仲間が仲間を呼ぶ形で、TENISHIPアソシエーションを含め10の小さな非営利団体が集まりました。中には戸所さんが直接接点のなかった団体もあったそうです。

- |                           |
|---------------------------|
| 1. 一般社団法人TENISHIPアソシエーション |
| 2. NPO法人あさはなネットワーク        |
| （ワークさはな）…就労継続支援 B 型事業所    |
| 3. NPO法人絆の会（福祉作業所ふれんど）    |
| …就労継続支援 B 型事業所            |
| 4. NPO法人シブヤ大学…生涯学習        |
| 5. 株式会社スマイライフ…訪問看護サービス事業  |
| 6. 聖心女子大学グローバル共生研究所       |
| 7. 青山学院大学ビックエンゲージメントセンター  |
| 8. NPO法人ヒューマンケアクラブストライド   |
| （ストライドクラブ）…就労継続支援 B 型事業所  |
| 9. 認定NPO法人フードバンク渋谷        |
| 10. NPO法人ホープワールドワイド・ジャパン  |
| （渋谷アトリエ福祉）…就労継続支援 B 型事業所  |

店舗の改修費を賄うためにクラウドファンディングにも挑戦し、211人から443万5000円の資金が集まり、無事オープンすることができました。オープン時には100人以上の方がお祝いに駆けつけたそうです。

戸所さんたちは、笹塚十号のいえの運営方法を「スイミーモデル」と呼んでいます。

小さな団体が集まって力を合わせて運営することで、「個体は小さくとも、力を集めることで、まる

### 運営団体一覧

で大きな魚のように不可能も可能にする」という絵本『スイミー』の世界を表していると言えます。ただし、多様な団体が集まるからこそ、同じ方向を指して進むためには、向かう先を丁寧にすり合わせる必要があります。多様な考え方もつ人たちがバラバラにならないよう、トップダウン型ではなく、対話を重ね、価値観やマインドを共有することを大切にしています。こうした運営のために、団体が構成メンバーとして月2回の運営ミーティングを開き、意思決定をしながら進む方向を話し合っています。また、運営団体が利用するにあたり細かい決まりはなく、営業日以外で空いていれば自由に使えます。これまで大きな方向性の違いで衝突することはなかったようですが、それぞれが家賃の10分の1を出し続ける中で、この場や活動の意義を地域や社会、自分たちの法人の理事や関係者にどう伝えていくかという葛藤を抱える場面もあるようです。



笹塚十号のいえ1周年記念イベント（SNSより）  
1周年を迎えた2025年2月15日、地域の皆さんや運営団体、ボランティアなどが十号のいえに集まり、にぎやかにお祝いしました。

それでも、制度のはざまをとくに支えるチームでありたいという想いが、運営を支えています。

## 「ささはたカフェ」での試行錯誤

笹塚十号のいえが、地域から信頼を得て開設できた背景には、戸所さんが地域包括支援センター時代に試みたことが下地になっています。その一つが2015年から始めた「ささはたカフェ」です。カフェといっても常設の場ではなく、笹塚・幡ヶ谷エリア内の3箇所の商店街の事務所を一部借りて、月1回巡回する形で開いていました。

地域包括支援センターという公的サービスの場では、個人情報保護や公平性の確保といった責任が求められる中で、それでも「もっとその人に寄り添える形はないか」と模索を続けました。そんな中、戸所さんは他の自治体の事業にヒントを得て、「まちの中にあって仕切りがなく、子どもから年配の方までふらりと集まれる場を作りたい」と同僚に相談しました。まず、協議体のような形で商店街や民生委員、大学、近隣の特別養護老人ホーム、社会福祉協議会、ボランティアセンターなど地域のキーパーソンとなる方たちに声をかけました。こうして10人ほどが集まり、会議を重ねて準備室を立ち上げ、生まれたのが「ささはたカフェ」です。商店街事務所前にテントを張り、ベンチを置いてカフェとするような小さな場ですが、人が自然と集まるところに支援者が出向き、積極的に人に会いに行くところが大きな特色です。

運営委員会方式で、複数の団体や個人がボランティアに関わり、思い思いの企画をするという「笹塚十号のいえ」の運営スタイルは、ここでの実践で磨

かれてきました。コロナ禍で一時期は開催回数が減ったものの、ささはたカフェを長く続けたことで地域住民への認知も広がり、運営者同士のつながりや信頼関係も培われていきました。カフェから派生して始まった活動も多く、「まちのお手伝いマネージャー」の原型もここにあります。



TEN-SHIP アソシエーションという団体名には「まちの縁を形づくる人の集まり」という意味が込められています

## 「まちのお手伝いマネージャー」はもう一人の家族

戸所さんは、社会福祉士、介護支援専門員、ホームヘルパーの資格を持つ、福祉の専門家です。元々は建築を学び、東京で建築設計・施工の会社に勤めていました。20代の働き盛りの頃に、両親の介護が必要になったことから、高齢化社会の課題やケアのニーズの大きさに気づき、30歳で福祉の世界へ飛び込みました。「何も知らなかったから、とにかく現場で働こうと思った」と、ヘルパー2級の資格をとり、特別養護老人ホームで働きはじめたものの、利用者一人ひとりに対して十分なケアを行き届かせられないことに直面します。ご自身の持病の関係で夜勤ができないことから、その後、社会福祉士として地域包括支援センターへと移られました。しかし、公

的なサービスでも、自分が理想とする支援が十分にできないことに悩み続けました。

とりわけ、孤独死の現場の多さに戸所さんは葛藤していました。「その人の生活歴を聞いていくと、孤独死する人は、最初から孤独なわけではありません。なかには仕事で海外を飛び回るなど、キラキラと輝いていた時代がある人もいるのです。そういう方が何らかのきっかけで転落して、そのうち家族も離れて、いつしか社会から排除されてしまう。この状況に、仕方がなかったと麻痺したくはない。生きていてよかったと感じられたり、失敗しても、もう一度何かに一歩踏み出せる、希望を感じられる社会を作りたい」という思いが、戸所さんをさらに突き動かします。

転機が訪れたのは、現在、一般社団法人TENSHIPアソシエーションの理事である、左京泰明（さきょう やすあき）さんと出会ったことでした。左京さんは、2006年にNPO法人シブヤ大学を立ち上げ、2017年から一般社団法人マネージング・ノンプロフィット代表としてNPOの中間支援や経営支援をされてきました。渋谷区でまちをつなぐ活動を様々に試みてきた左京さんは、福祉については全く知りませんでした。しかし、8050問題は今や当たり前、9060、10070問題が起きているといった現状を知り、とにかく現場で、困っている人のそばにいたいという熱い思いを持つ戸所さんが、やるべきことに専念できるよう、経営に参画しました。「まちのお手伝いマネージャー」（アウトリーチ事業）を核として課題の解決につなげる、一般社団法人TENSHIPアソシエーション

ヨンを戸所さんとともに立ち上げました。

「まちのお手伝いマネージャー」は、もう一人の家族として、主に一人暮らしの高齢者とその家族や、障害者などの暮らしに寄り添っています。福祉や看護の専門性を持つボランティアがお手伝いをきっかけに、その人と接点をもつことが目的です。2020年から、十号商店街の中にスペースを借りて、まちのお手伝いマネージャーの旗を掲げ、「十号いこの場」と名付けて週3回、商店街を通る人に挨拶をすることからスタートしました。なんでもやりますよと声をかけて、電球の交換、ごみ捨て、掃除、通院の付き添い、買い物代行、草刈り等、まちの人のちょっとした困りごとをお手伝いするようになりました。



思い立ったら即行動。  
この先も現場で走り続けたいと語る戸所さん

30分まで300円、1時間まで600円という価格のため、生活に困っている人でも依頼しやすく、そこで接点をもつことで、必要に応じて支援や、他の専門家につなげるなど、課題解決につなげています。そうした中には、障害をもつ親御さんが高齢化しているケースや、そこに経済的な困窮が重なっているような複合的な課題を抱える世帯もあります。行政の所管が複数にまたがり、動きにくくなってしまっている場合にも、積極的にアウトリーチを行っています。「ささはたカフェ」時代からの縁で、現在20人ほどがボランティアの「お手伝いマネージャー」として活動しています。時には学生に呼びかけて参加してもらおうこともあり、学生、高齢者の双方から喜ばれているようです。

### 居場所があると人は変わる 誰もが気軽に立ち寄れる、安心安全の基地を 地域に広げたい

「まちのお手伝いマネージャー」を始めて3年ほど経った頃、十号いこの場にあるたった一つのベンチで、さまざまなドラマが生まれたそうです。ある時、ベンチを利用していた高齢の男性の様子が明らかにおかしいと気がつき、地域包括支援センターとつながって見守りが始まりました。その方は、支援の手を拒否して受け入れませんでした。その方は、心配だからと声を掛け合うことで、仲間や近隣の人たちがその高齢者を気にかけて見えてくれるようになったそうです。最期をお一人で迎えることにはなりませんが、長期にわたって誰にも気づかれないということはなく、公的サービスの公平性の枠を超えて、地域で見守れた、やれることはやったと戸所さんは思えたそ

うです。



笹塚十号の家の2件隣にある  
「十号いこの場」  
このベンチが地域のつながりを生んだ

その体験から、ベンチのように、誰もが自由に気軽に居られる場所がもっとあったらと、常設の場の必要性や可能性を感じるようになりました。そんな折に、八百屋のスペース活用の話がありました。

戸所さん一人では実現できなかったことが、仲間との共同運営という形で、十号のいえ誕生につながったことは、地域にとって大きな一歩となりました。こうしたプロセス全体が評価され、2024年にグッドデザイン賞を受賞されました。

笹塚十号のいえは、誰でも立ち寄れるがゆえに、いいことばかりではなく、時に、利用者同士での喧嘩が始まったりもします。「たくさん人がいると入りづらいとか、派閥が生まれるとか、問題も起こりますが、それも受け入れていきます。安心して任せられる事務局スタッフがいてくれるおかげです。寄り添い、話を聞き、自然体で場を整えてくれることがとても大きいです。運営に関しては、経営面で支え



店番は基本的に二人の事務局スタッフのどちらかが入り、あとはボランティアでシフトを組んでいる。取材の日に笑顔で来訪者に応じていた吉川さん

てくれる左京さんがいて、複数の団体がいても、混乱などが生じることは特にありません。企業から協賛を得られたことで、交通費や食費手当として、ささやかながら人件費もお支払いしています」

戸所さん自身は、まちのお手伝いマネージャーとして現場を動き回っているのですが、十号のいえにいる時間は、ほとんどありません。「月に300件ほどの依頼があるうち対応できるのが100件ほどで、かなりの件数を断っていることが課題だと感じています。今日も通院同行、アパートの階段の掃除、草むしり、お庭の掃除、水まきをしました」と語る戸所さん。やりたいことは山ほどあり、お金や人の課題は常にあるけれど、不足を一旦抜きにして、「あったらいい会議」を開き、夢を語り合うような会を始めたいそうです。



ボランティアの大学生が、訪れた高齢者と会話を交わしながらネイルを塗る

### 行政は大動脈、民間は毛細血管 行政に期待すること

「行政の方々は3年から5年で異動してしましますが、笹塚十号のいえは、行政との関わりも密にあり、利用者と支援者をつないだり、紹介したり、相互に協力できていると思います。部署でいうと、渋谷区福祉部の高齢者福祉課、障がい者福祉課、生活福祉課（生活保護関係の部署）、保健所、各地域包括支援センターと関わっています。また、社会福祉協議会が受託している地域福祉コーディネーターとも連携しています。私たち民間の現場は身体に例えれば末端の毛細血管で、現場の情報を大動脈に持っていくので、行政はそれをうまく利用して事業化してもらえるとよいと考えています。そして、大動脈が毛細血管にサポートする、そんな相互関係がいいなと思っています。また、今は10団体共同で家賃負担をしています。地域に開かれた活動の場を確保し、地域のために場をつくらうとする団体や個人が継続的に活動できるようにするために、できるならば、何か一定の基準を設けて、家賃補助の仕組みがあればと思っています」。

「あったらいい会議でも出てきた話題の一つで、今後、障害者の住まいのサポートを充実させることについて行政の福祉部に提案や提言をしたいと思っています。行政が足りない部分をやってくれというのではなく、大動脈と毛細血管の関係でうまく連携していければいいと思います」と、戸所さんは前向きな言葉で、未来を語ってくださいました。

### 運営を支える立場からみた笹塚十号のいえ

取材当日は左京さんにお会いできなかったため、後日改めて左京さんにお話を伺いました。

「共同して運営するそれぞれの団体が「地域の中に自分たちが自由に使える場所や、気軽に寄れる居場所を作りたい」「そんな場があったら、こんなことをしてみたい」と願っていて、それが戸所さんの呼びかけに共感して形になったのだと思います」と話します。

さらに、笹塚十号のいえは、福祉部だけでなく、子ども家庭部や教育委員会、区民部など様々な部署と横断的に連携しています。「外からの団体だからこそ、行政の縦割りを超えて数多くの部署とつながれているのだと思います」とも話します。

これから地域で同じような活動を始めたい人への助言を尋ねると、「いきなり十号のいえのような拠点を持つ必要はなく、もっと小さな一歩から始めればいいと思います」と答えてくれました。「例えばイベント的に場所を借りて開いてみる、ささはたカフェのようなコミュニティカフェを定期的に開催し、活動日数を増やしながら少しずつ地域の信頼や仲間をつくっていく。その積み重ねの先に『自分たちで場所を持つ』という話になるのではないでしょう

か。実際、十号のいえを始める前には、渋谷区と協力して旧笹塚敬老館で3か月間、誰でも気軽に来られる町のリビングをつくろうという社会実験を行いました。段階を踏んで今の形になっています」と振り返ります。

また、戸所さんとのパートナーシップについて、「戸所さんのような福祉の専門家はやはり現場で利用者寄り添うことに一番の思いがあります。だからこそ、経営面のごことは優先順位が低かったり、元からあまり得意でなかったりする場合も多いです。私たち経営の専門家が外から助言するだけでなく、直接団体に関わり役割を補い合うことで活動は安定し、地域に持続的な力を届けられると思います。異なる分野の専門性や得意なことを持つ人たちと共同し、不足しているスキルや視点を補っていくのも大事です。」と語ってくれました。

### 取材を終えて

本事例は複数の団体が共同で地域の福祉拠点を運営し、複合的な課題の解決に民間で取り組む新しいモデルです。多岐にわたる社会保障制度が整備されているにもかかわらず、必要な支援が届かない現状に対し、課題意識を持っている方にとって、笹塚十号のいえの取り組みはヒントになるはずと。とはいえ、こうすればよいというセオリーはなく、運営者の熱意や多様性が場の多様性につながることや、その地域ごとに小さく始めて仲間を得ていく過程が大切なこともうかがえました。また中間支援、経営支援の立場で裏方をしっかり支える人がいる点も重要です。

高齢社会を考える上で、地域の中間支援的役割を担う人や団体とのつながりを作り、その活動が継続できるように支援策を講じることも、行政ができることの一つと言えるのではないのでしょうか。

### (2)

### 通いの場の「担い手」をみつげるために

東京都健康長寿医療センター研究所  
東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター

中本 五鈴

### はじめに

多様な通いの場を推進していく中で、通いの場の立ち上げ、継続、展開、どのフェーズにおいても、通いの場の運営・活動を支える住民(担い手)の存在が必要不可欠です。現在、自治体が把握する多様な通いの場数は増えていますが、多様な通いの場の担い手に関しては十分に整理がされていない実状があります。そこで、当センターでは2024年度に「多様な通いの場の担い手となりうる住民層に関する調査」を実施しました。本稿では、この調査結果から見えてきた「担い手」の姿を、担い手になった動機と担い手が求める役割の2点をご紹介します。

### 調査の説明

「担い手」の実態を量的・質的に把握するために、アンケート調査とインタビュー調査を実施しました。アンケート調査…2024年10月～2025年1月に、東京都(4区市)、神奈川県横浜市、岡

山県倉敷市、大分県玖珠町の7の区市町村の介護予防事業関連の担当課を通して、通いの場の代表者を紹介してもらい、代表者より通いの場への訪問許可が得られた268グループで調査を実施しました。調査員がグループを訪問して調査票を配布し、自宅で回答して返送してもらいました。266グループの2288名より回答を得ました(有効回収率…72.5%)。

<b>担い手の定義</b> 通いの場の企画・運営を中心的に担う住民にとどまらず、活動を補助的に支援したり、不定期に参加したりするサポーター・ボランティアも含む。	
<b>通いの場を構成するメンバー</b> <ul style="list-style-type: none"><li>代表者</li><li>代表者以外の運営者</li><li>運営の手伝い</li><li>参加者</li></ul>	} 運営者 } 担い手
<b>通いの場での具体的な役割</b> <b>〈中心的役割〉</b> <ol style="list-style-type: none"><li>活動の企画・準備</li><li>活動当日の司会・進行</li><li>会計・経理</li></ol> <b>〈周辺の役割〉</b> <ol style="list-style-type: none"><li>会場の設営や、お茶出し・調理</li><li>趣味や特技の披露や、教える</li><li>会場までの移動の手助け</li><li>専門的知識の提供(医療・保健・福祉など)</li><li>体操・運動の指導</li><li>パソコンを用いた作業(会報、チラシ、ホームページづくりなど)</li><li>参加者を増やすための取り組み(チラシ配布、声かけなど)</li></ol>	

図1.担い手の定義

インタビュー調査…2024年12月に、都内10箇所の「多様な通いの場」の運営に関わる代表者11名、代表者以外の担い手27名にインタビューを実施しました。

## 担い手の定義

通いの場を継続するためには、一部の住民のみが役割を担うのではなく、メンバー全員が得意を生かし、お互いに協力しながら運営することが求められます。したがって、本調査では「担い手」を、通いの場の企画・運営を中心に担う住民にとどまらず、活動を補助的に支援したり、不定期に参加したりするサポーター・ボランティアも含めて定義しました<sup>1)</sup>。

そして、役割の度合いによって「代表者」「代表者以外の運営者」「運営の手伝い」の3つに分けるとともに、通いの場での具体的な役割を中心的・周縁的役割10項目で整理しました(図1)。

## 住民が担い手になった動機

アンケート回答者のうち、「代表者」255名、「代表者以外の運営者」231名、「運営の手伝い」66名、「参加者」1136名と、半数が担い手でした(50.3%)。

担い手に、グループ活動の運営やお手伝いに参加した理由を聞いたところ、通いの場のタイプや役割によって異なる傾向がみられました(図2)。通いの場のタイプは、こちらの令和2年に、「通いの場の概念整理検討委員会」で検討し、報告された定義<sup>2)</sup>に基づき、タイプⅠ・生きがいや楽しみ、タイプⅡ・交流・孤立予防、タイプⅢ・心身機能の維持・向上をそれぞれ主目的とする3つに類型しています(図3)。

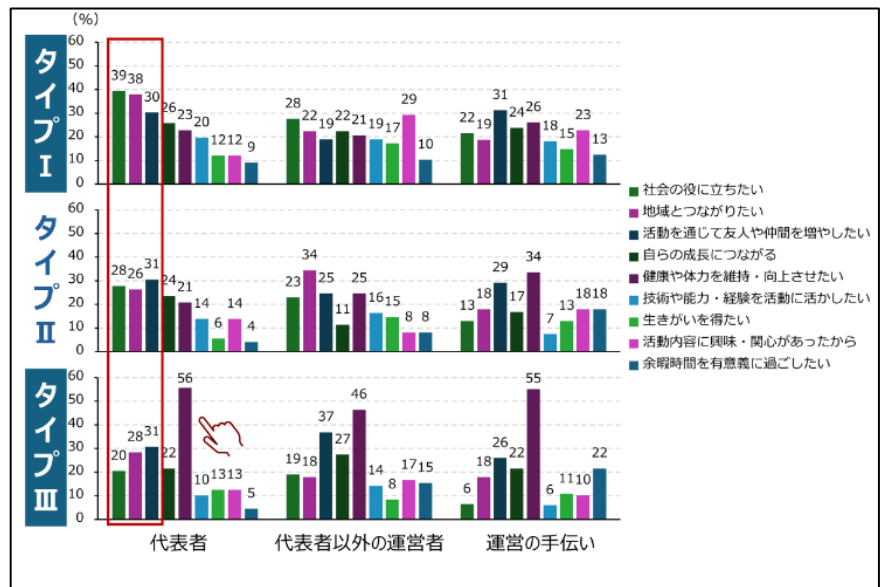


図2.担い手になった動機

代表者に着目すると、「社会の役に立ちたい」「地域とつながりたい」「活動を通じて友人や仲間を増やしたい」を動機とする者が多く、一方タイプⅢでは「健康や体力を維持・向上させたい」を動機とする者も多いという結果でした。

さらに、代表者へのインタビューからも、「孤立や孤独を防ぎたい」「住民の様々な困りごとに対処したい」など様々な地域課題を認識し、課題を解決するためにも「誰かと一緒に地域活動をしたい」として自らも「最期まで住み慣れた地域にいたい」と地域に立ちたいという思いで担い手になってい

ることが分かりました。

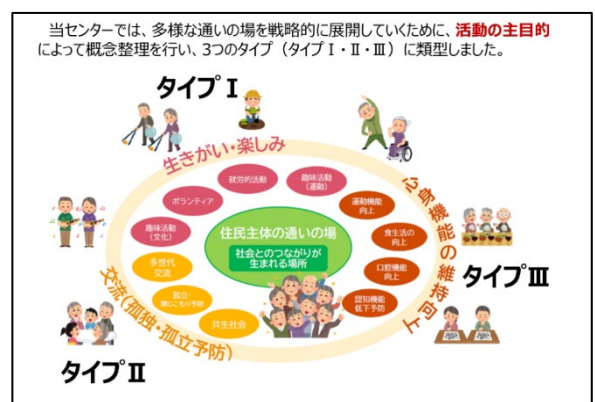


図3.通いの場の類型

住民主体の通いの場という原点にかえると、住民の言葉に耳を傾けて、多様な担い手の思いを形にする通いの場づくりを行政として支援することで、担い手の「やってみたい」を引き出すことができ、担い手を見つけることにもつながるのではないでしょう。また、地域アセスメントを実施し、タイプⅠの通いの場を立ち上げる必要があると計画を立てた際は、住民に「健康維持や介護予防のために」と訴えるだけでなく、「社会貢献や地域とつながるために、通いの場で活躍してみませんか？」と住民の関心を引く声掛けを行うことが効果的です。

「担い手が求める役割」と「参加者が担ってもよい」という役割

通いの場を継続、展開していくフェーズでは、新

たな参加者を増やし担い手を確保する方法だけでなく、グループが求める役割を整理し、その役割を既存の参加者に担ってもらい、より多くのメンバーで役割分担をするという方法も重要です。そこで、アンケート調査で把握した、担い手からの「グループの運営のために参加者に求める役割」の回答と、参加者からの「担ってもよいと思っっている役割」の回答結果を示します(図4)。

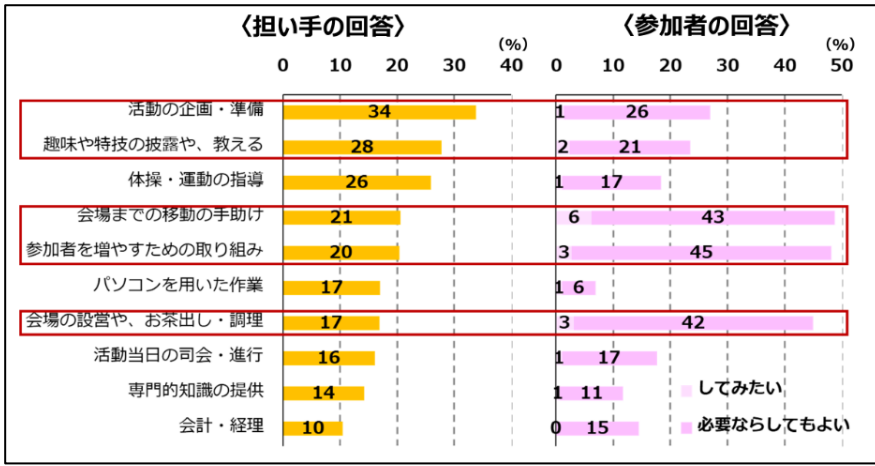


図4.担い手が求める役割と参加者が担ってもよいと思う役割

参加者の回答で、「してみたい」という回答は少

なかつたものの「必要ならしてもよい」という回答を合わせると2割以上の役割が5項目もありました。そして、担い手が求める役割で割合が高かった項目と、参加者が担ってもよいと思う役割が一致していることも分かりました。

したがって、遠慮して参加者に役割のお願いをできていないグループには、グループを運営する上で役割を今回の10項目も参考に整理し、その中でお手伝いを求めている役割を確認し、参加者の得意を生かしながら分担できる役割がないか、グループメンバーで相談する機会をつくれるとよいでしょう。また、どのようにグループ内での役割を分担しているのかは、他のグループでの取り組みを共有し合うことで、住民自らの気づきや取り組みにつながるのではないのでしょうか。そのような機会づくりを行政として支援することで、参加者の中から担い手をみつけることができそうです。

### まとめ

通いの場の担い手を考える際に、①どのようなタイプの通いの場か、②立ち上げか、継続支援か、③地域住民から見つけるか、参加者から見つけるか、④どのような役割を担う担い手か、という点を明確にすることで、より最適な戦略を立てることが出来ます。「担い手を見つけるためのヒント集」には、通いの場の運営者ができる6つのことと、それに対応した自治体に求められる支援のポイントをまとめましたので、そちらもご活用ください。



### 参考文献

- 1) 小林江里香, 根本裕太. 通いの場の担い手としての住民参加—都市部の中高齢者における—の分析. 老年社会科学, 2023, 45(3), 255-63.
- 2) 植田拓也, 倉岡正高, 清野諭, 他. 介護予防に資する「通いの場」の概念・類型および類型の活用方法の提案. 日本公衆衛生雑誌, 2022, 69(7), 497-504

次回のメールマガジンは9月下旬を予定しております。

配信期間中に登録内容変更、配信停止のご希望がございましたら、当センターまでご連絡をお願いいたします。

【お問い合わせ先】  
 東京都健康長寿医療センター研究所  
 東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター  
 E-mail: [shien@tmig.or.jp](mailto:shien@tmig.or.jp)  
 TEL: 03-5926-8236 FAX: 03-5926-8237

本稿に記載できていない内容がありますので、是非「担い手を見つけるためのヒント集 ~みんなでつくる通いの場~」もご参照ください。(冊子は5月ごろ事業案内と一緒に送付)